澤田英史さんの思い出

浜本　純逸

澤田英史さんは、「両輪の会研究会」会場入口近くに三つ揃いの背広を着て立っていた。背広の胸を開いて両手をチョッキのポケットに入れ、ドアにもたれかかるようにして右足を左足の上に重ねて立っていた。時におどけてポケットから手を出すと西部劇の用心棒よろしくピストルを撃つポーズを取ることがあった。その後、あの柔和な目を細めて「私がご案内します。」と言って会場の方を指さすのであった。ユーモラスなポーズは参会者の心をなごませた。

澤田さんには厳しい現実に負けぬ「気力」があった。気力が用心棒になってみせる「ユーモア」を生み、短歌を作る「ゆとり」を生んだ。澤田さんのユーモアは、「枠組み作文」を「たいやき作文」と名づけ、話しことばの力を育てる帯単元を「私の好きな詩句発句」と命名した。また、辛い闘病生活を眺める「ゆとり」を生み、すぐれた「和歌」を生んだのであった。

澤田さんの歌には「青空」・「宙」という言葉が愛用されていた。「青い空」・「広い宇宙」を思い浮かべるとき「幸せ」を感じていたのではなかろうか。

私も寄る年波で、やがて西の方へ行くときが近い。西の方で澤田さんと「短歌の話」などをしたいと思っている。

(2016.08.29)